

(雜 錄) ○ヤマネの分布と習性

● ヤマネの分布と習性

ヤマネとは *Gliridae* 科に屬す全長三寸五分乃至四寸位の

一小獸の名であつて其形狀は第一圖に示す様なもので粟鼠類と野鼠類との中間のもの

である。實際分類上の位置も粟鼠科、海狸科の次で即ち鼠科との間にあるのである。本種は我國では一科一屬一種で

始めの學名を *Myoxus japonicus* SCHINZ と呼んでいた

がトマスによると *japonicus* の誤りであるとのことである。

次の名が *M. elegans* FLEMINGK であるが不幸にして此名は南

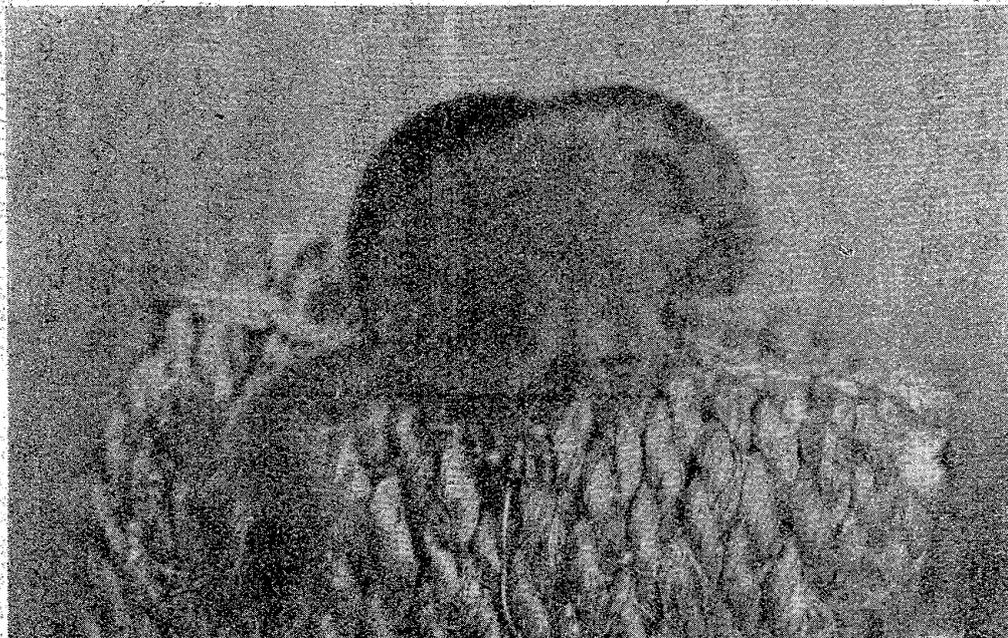
亞弗利加の種類に OGILBY (P.Z.S., 1838, p. 5) によつて

先取せられているので更にトマス (P.Z.S., 1880, p. 41) は

M. lasiotus とした。其後に至つてトマス (P.Z.S., 1905, p. 347) は終に此種の屬を新

しいものとして發表し *Glirulus* と命じた。最近の學名

としても稀れな種類であると云ふことだけは確であろう。



第一圖 ヤマネの巢

としては *Glirulus japonicus* (SCHINZ) (青木理學士日本動物學彙報第八卷二九八頁) と呼ぶことゝなつた。本種の分布としては本州と四國とで他の地方では獲られたことは無い。此種の始めて見せられたのは四國の阿波國 (FLEMINGK, 1842) で次は横濱附近で H. PRYER が採集せるもの (THOMAS, P.Z.S., 1880, p. 41) である。其他日光、富士山麓 (波江氏、静岡民友新聞大正五年八月十八日、廿一日) 及び山形縣西田川郡福榮村 (波江氏報) で採集され信州の山地 (筒井清治君旅行中の實見) にも棲息することであるが以上の外本種の分布地として追加することは現今では出来兼ねる。余は本年十二月十一日下野日光の山地で獲られた一活物を入手することを得た。話によると日光では中々珍らしく十ヶ年に一度位しか捕獲されぬとのことである。實際であるか否かは不明である。

最近の學名としても稀れな種類であると云ふことだけは確であろう。

今度入手したものの色彩は Temnick の圖と比較すると餘程淡色である。背の黒縦線は同じである。

次に習性に就て記して見れば捕獲した人からの通信によると此種は四月頃より九月頃迄は山中の古木の廻りに棲み、

十月頃より四月頃迄は樹の穴に樹葉で巢を造り

冬季間は食物を喰はず、球形となり尾で顔を被

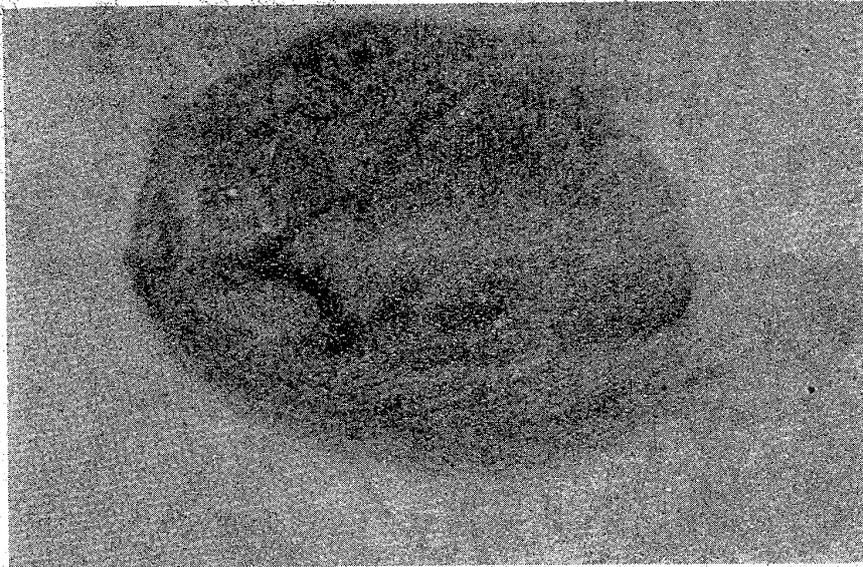
ふて居るとのことであつた。

(第二圖參照)今飼養して居るものに就て注意して見て見ると十

二月十四日に到着した時には箱

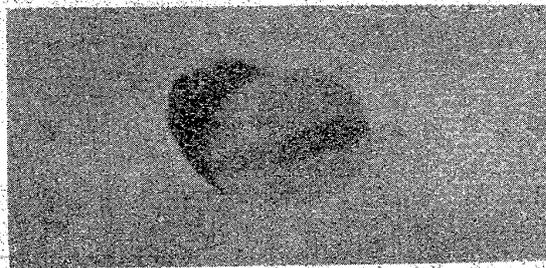
の内に入れてある巢から出て盛んではないが可なり活動

をして居つた特に夜になると木製の箱を盛んに齧る音を聞いた。一兩日の後は晝間は餘り巢から出なくなつて夜



第十圖 側面より見たマネの冬眠の概圖

のみ出る様であつた然し夜も夜通しではない様である。同月十八日には晝間は一回も巢から出て来ないで午後八時に始めて巢から出て一度籠(木箱を廢して金網の籠とした)の中を歩き廻り直ちに食物を喰ひ始めた。約一時間半食ひ續けて排泄物を出し再び巢に入り約卅分の後更に巢より出でて糞を排泄し又入つた其後は終



第十圖 毛背の面を如く見たマネの冬眠の概圖

り取り出すとも少しも動かさず(第三圖參照)軟かい毛毬の様で掌中に置いて少しも動かない。熟視して見ると只僅かに呼吸して居るのが見えろのみであるが今口で一寸吹いて見ると稍明瞭に動くが決して球形から體を延ばす様なことはない。今度は尾の先端を摘んで釣り下げて見ると尾の基部迄は延びる

に一回も出でず翌朝食物を調べたが喰つた様子は全くなかつた。十九日より以後は一回も(夜も)巢から出て来ない。即ち最早真の冬眠(冬眠)を始めたのであろう。斯くの如く冬眠をして居るものを巢よ

(雜 錄) ○ヤマネの分布と習性

(雜 錄) ○ヤマネの分布と習性

れどもそれから體の方は矢張り球形の儘である。ヤマネは食物を喰じて居るとき音を立てても平氣であるが口で吹くと飛んで逃げる即ち風を嫌ふのである。冬眠中の球形のものゝ體重は僅三匁しかなかつた。

以上の結果から見ると排泄物を巢内に出すことは少ない様である。排泄物は淡橄欖色又は暗緑褐色である之れは食物により異なるであらうけれども現今飼養のものには緑色の菜を與へて居らぬ故一寸不思議に思はれる。竹下理學士(動物學雜誌第廿九卷二九七頁)が鼠の尾に就ての實驗中に鼠が歩行するときに尾を引摺る様なことはなく水平に支へてゐるとのことであつたがヤマネにあつても鼠程著しくはないが尾を引摺ることはなく又非常に大切にするものと見え排泄後それに接觸せしむる様なことはない。

食物に關して捕獲人よりの通信によると生米、生甘諸、栗、落花生等でよいとのことであつたが到着の後、米、甘諸、栗、大根、及び落花生を籠内に入れて置いたが甘

諸と大根とは好んで食したが他のものは全く喰はなかつた。後二者は何れも横斷した片を入れ置きしに其縁は殆ど食せず中央のみを齧つた(第四圖參照)。巢内を検して見るに甘諸の乾燥せる小片々があるのを見た。

余の今回實驗し得た習性は以上のみであるが外國書に記載された近似種の習性を附加し比較を試みようと思ふ。

第 四 圖
甘 諸 の 横 斷 面 中 央 の 齧 れ 跡
圖 四 第

英吉利に産する一屬一種の「コモン・ドーマウス」(*Muscardinus uellamaris*)と稱する近似種でも Sleep Mouse, Sleeper, Seven Sleeper などと云ふ別名がある如く冬眠するので有名である。その冬眠の永さは五乃至六ヶ月間に渡るので其始めは秋十月の中頃からで三月下旬乃至四月迄である此期間内では秋には多くあつた脂肪は全く消失してしまふ故に Rabus 博士も冬季間には彼れの體重は著しく減ずると云っている。又同氏によると此種類の雌では冬眠六ヶ月廿三日のもので彼の體重は夏期の場合より十一匁即ち三〇「パーセント」減じたこととなると。又冬眠六



ケ月十九日のものでも同様の結果を得ている。此二例の場合にあつて冬眠後僅か二三日にして最大の重量に復すことを實驗した。又 FORBES 教授によると此冬眠は恰も昏睡状態にあるので直接寒氣に關することなく體の組織内の脂肪層の堆肥に基因すると云つてゐる。所が同氏は大陸産の *Myoxus glis* と云ふ近似種に就て實驗したところによると冬季間温室に雌雄を飼養し充分食物を與へて冬眠をさせずに置いたところが五月になつてから始めて知覺を失ひそして六、七月を通し八月の半迄眠つた。此動物の體温は華氏七十度位ひであつた。斯くの如くで温室實驗は自然に於ての實驗の先例を打消したが然し冬眠中此種の不思議な頑性（即ち全身球形となつて球の如く「テーパー」を轉がり通ることも出来る）は事實上或る重量を増している。

飼養状態が適當であるならば自然に肥大なること、又或程度迄肥大せしめて置くこと及び温度の降下は呼吸及び循環作用の兩者共不完全な失神状態を誘致し得ると云ふこと及びは結論としてさして理のないことではない。

温度の穩な上昇は器械を適當に動かすが急激な上昇は器械を毀すのと同様である。SAISSY の實驗は此種類の血液とその循環とは特性を有するものであると云ふ事を指點して居る様である。

此種類のものには特に夜性を有している故晝間は巢内に眠つて黄昏に出で、食を求めゝ。又冬季の巢は球状のもの

(續) ○ヤマネの分布と習性

のでその材料は小枝、樹葉、蘚苔及び草莖であつて秋に造り冬季間の食量として巢内に少しの食物を貯藏してゐる。繁殖の爲め及び冬季の巢は共に同じ叢林に營まれ時としては十乃至十二の巢を同一の場所に見ることがある。冬季でも溫暖の日には巢内の食物が欠乏したときには出てくることがある。

食物は主として榛子、櫛子、榲實、穀粒及び他の漿果類である。

幼獸は成獸の様に秋早く冬眠を始めない。英國では春に産れるのが普通であるが又九月に産れるものもある。夫故一ヶ年に二腹産れるのであらうと云ふことである。然し大陸産の種類ではブレイムによると八月迄は産れないと云ふ。一腹の幼獸の数は三乃至四で産れたばかりのものは盲目で且つ裸體である。

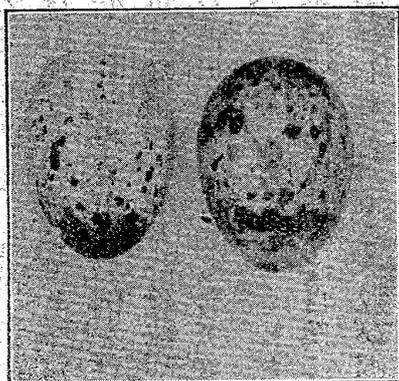
大陸産の種類で最大形のもの *Glis esculentus* と呼んで栗鼠の様な尾を有している我がヤマネよりは數倍大なるもので頭胴は六吋餘、尾は五吋弱のものである。此種の冬眠も七ヶ月以上を要し四月末に稀には出てくることもある。幼獸は時として歐洲産椋鳥の一種 (*Sturnus vulgaris* L.) の古巢内で産れることがある。そして一腹の数は三乃至六である。食物は各種の堅果類及び漿果類の外果實をも喰ひ又小禽及び他の小獸をも貪食することがあると云はれてゐる。之れに反し此種は貂類、鼬鼠類及び山猫類の食餌となる。英國の種類と同じく此種も容易

(雜 錄) ○逆斑鳥卵の數十例

に馴らしむることが出来て活動期即ち夏期は中々愛らしき籠の動物と云ふべきであると。(黒田長禮)

●逆斑鳥卵の數十例

本誌第廿九卷三四四頁に仁部氏は予が嘗て『鳥』第二號八八頁に同氏の話なりとしてオホヨシキリの卵にも屢々逆斑の例ありと記したるは恐らくモズ卵の誤聞なる可しとて其誤



ホヨシキリ物(挿圖参照)

解を招かざる様特に一言せられたり。此事は誤聞なりしかもしれざれど余はオホヨシキリ

で採集せるものにして其一つは大正四年五月卅日に又他の一つは同六年六月廿五日に採集せるものにして共に一巢内の卵数は五個なりき。寫真左圖は後者にして右圖は前者なり。左圖の方は特に著しく鋭端に斑紋密集するを見るべし。仁部氏が多くの本種の卵を調査せられし由なるも然かも一卵も逆斑を認められざりしより考ふれば本種の卵には此例極めて少きことを知るを得るなり。余も亦前記二例の外には全く見ざるなり。

次に参考の爲め外國書に圖說せられたる逆斑の例を調べ見しに比較的少く左に列記する卅二種の鳥卵に於てのみ認め得たり。※印あるものは極めて明瞭なる逆斑にして×印あるものは比較的明瞭を缺くもの而して印なきものは兎に角逆斑なりと認め得るものと知るべし。學名は凡て参考書に記載せられたる儘に記す。

E. W. Oates: - Catalogue of the Collection of Birds' Eggs in the British Museum (1901-1903, 1905) 七五-八二

- 1901, Vol. I, Pl. II, fig. 7. *Tetraoallus tibetanus* GOURD (雉科)
- “ “ “ “ fig. 8. *Tetraoallus altaicus* (GEBER) (雉科)
- 1902, Vol. II, Pl. X, fig. 3. ※ *Accipiter rufiventris* SMITH (鷹科)
- “ “ “ “ fig. 5. ※ *Polyboroides radiatus* (SCOP.) (鷹科)
- “ “ “ “ Pl. XI, fig. 3. ※ *Accipiter melanochistis* HUME (鷹科)
- “ “ “ “ Pl. XII, fig. 3. ※ *Rupornis magnirostris* (GM.) (鷹科)
- “ “ “ “ “ “ fig. 4. × *Buteo jacob* (DAUD.) (鷹科)
- “ “ “ “ “ “ Pl. XIV, fig. 1. × *Buteo madagascensis* (SMITH) (鷹科)
- 1903, Vol. III, Pl. VI, fig. 16. *Pitta cyanoptera* TEMM. (ヤマトウの類)
- “ “ “ “ “ “ fig. 18. *Pitta mulieri* BONAP. (ヤマトウの類)
- 1905, Vol. IV, Pl. V, fig. 13. ※ *Merula gymnocephala* CAP. (ヤマトウの類)
- “ “ “ “ Pl. VI, fig. 14. ※ *Zoothera marginata* BLYTH (鶇科)
- “ “ “ “ Pl. XII, fig. 5. *Eurocephalus angulatus* A. SMITH (ヤマトウの類)
- “ “ “ “ “ “ fig. 12. × *Fisicus eximiorius* (PÉV. & DES MURS) (鶇科)